

《2013年6月例会報告》

【日時】2013年6月15日（土）11：30～12：45

【会場】国立競技場 クラブルーム（新宿区霞ヶ丘町10-2 国立競技場内）

※国立競技場敷地内のレストラン「オリンピア」の奥の会議スペース。

【演者とテーマ】

梶原 宏之（ラグビー元日本代表／山梨県高体連事務局長） … ラグビーの歴史と文化

村田 互（ラグビー元日本代表／専修大学ラグビー部監督） … 7人制と15人制ラグビーの現状

【参加者（会員）10名】井上俊也（大妻女子大学）、浦和俊介（(株)フォーレックス）、金子正彦（会社員）、小池正通((株)La Esperanza)、嶋崎雅規（帝京高校）、白井久明（弁護士）、白髭隆幸（国際スポーツプレス協会会員）、中塚義実（筑波大学附属高校）、本多克己（(株)シックス）、村田互（専修大学）

【参加者（未会員）5名】★五十嵐雅人（日本サッカー狂会会員）、★浦和隆（会社員）、★梶原宏之（山梨県高体連）、★小塩康祐（司法修習生）、武井大介（公務員）、★平野貴大（教員）

注1）★は初参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】浦和俊介

1：ラグビーの歴史と文化

2：7人制と15人制ラグビーの現状

ーテストマッチ 日本代表 vs ウェールズ代表 プレイベントー

演者1：梶原宏之（ラグビー元日本代表選手／山梨県高体連事務局長）

演者2：村田 互（ラグビー元日本代表選手／専修大学ラグビー部監督）

コーディネーター：嶋崎雅規（帝京高校ラグビー部監督）

<目次>

I. プレゼンテーション1：ラグビーの歴史と文化

梶原 宏之（ラグビー元日本代表選手／山梨県高体連事務局長）

II. プレゼンテーション2：7人制と15人制ラグビーの現状

村田 互（ラグビー元日本代表選手／専修大学ラグビー部監督）

III. ディスカッション

I. プレゼンテーション1：ラグビーの歴史と文化

梶原 宏之（ラグビー元日本代表選手／山梨県高体連事務局長）

◆はじめに

こんにちは。梶原と言います。先ほどご紹介いただいたとおり、筑波大から東芝で5年間プレーしまして、その後父親の具合が悪くなり、長男ということで家を継ぐために山梨に戻り、山梨県の教員採用試験を受けまして、最初の赴任先は南アルプス市の白根高校で三年間。

「そんな学校知らねえ」と言われましたけど（笑）

その後、桂高校で11年間体育教員としてラグビー部の指導をしました。

花園予選決勝で、ライバルの、私の母校でもある日川高校と対戦しまして、4回優勝し、2回花園に出場しました。

4回優勝のうち同点優勝が2回でした。同点の場合ラグビーではどうなるかということ、抽選になります。時間があれば皆さんの意見をお聞きしたいのですが、サッカーではPKですね。これはフェアだと思います。ラグビーの場合くじ引きということで、生徒や私、地域の保護者の方々とも非常に悔しい思いをしました。

2回目に抽選で負けた時、悔しくて、イギリスのラグビーの歴史について調べました。

今回はサロンということでラグビーの歴史について少しお話をしたいと思います。

◆イングランド流決着方法

抽選ということでは、イングランドでは昔から、抽選はフェアじゃないので絶対やらない。

高校対高校の対抗戦でどうするかということ、同点の場合はトライ数、コンバージョン、日本はここまでですが、イングランドではどうなるかということ、ペナルティ数が多いほうが負けになる。その時、日川と桂はペナルティ数も同じでした。

ペナルティ数も同じ場合、イングランドでは決まっています、競技場から遠いチームの勝ちなんだそうです。

日川高校より桂高校のほうがはるかに遠かった。（笑）

なぜ最初に抽選で負けたとき、調べなかったんだろうと悔いが残りました。（笑）

ラグビーにはラグビー精神というのがありまして、両者優勝でよいのではないかと。ノーサイド精神という代表的な考えがありますので、延長戦はやらないという考え方なのですが、くじ引きはフェアではないのかなと。

こうして調べていくなかでラグビーの歴史に興味をもちました。

案外皆さん知らないのではないのでしょうか。

◆ラグビーの成り立ち

梶原 先生方は研究なさっているのでご存知かもしれませんが、横のラインを出ると何と言いますか？

平野 「タッチ」で、ラインアウトによってゲーム再開ですね。

梶原 何ラインですか？

平野 タッチラインですね。

梶原 どうしてタッチラインというかご存知ですか？

参加者 人垣があった。触ったらタッチ

梶原 横のラインでサイドラインとも言いますが、サッカーでもイングランドの放送を聞くと「タッチ」といいますね。フットボールです。ラグビーではタッチですね。

ラグビーはエリート校で広まったこともあり、The NINE という高校(パブリックスクール)ですね。歴史的建造物が校舎になっていて、ボールを当てて破損させてはいけないということで、後輩を立てていたんですね。後輩に触れたらボールは出たことにしよう、もしくはプレーヤーが後輩に触ったら出たことにしようということでタッチ、タッチラインとなったわけです。

スクラムっていうのがありますね。変な形ですね。うちの子たちがラグビーを見ると「パパ、選手がカニになったよ」と言ってきます。子供にはそう見えるみたいですね。スクラムの起源はご存知ですか？

参加者 わかりません

梶原 この後にも出てきますが、フットボールは村と村の抗争が起源ですが、のちにラグビーとサッカーに分かれます。ルールが変わっていく中で、騎馬戦のように高く組んでぶつかり合っていたみたいで、上から落ちると死人も出たりして危険だということで、上に高くするのではなくこれを倒して横に長くして平行に組んだのだそうです。

しかし安全にしたといっても今でも危険なのですが。

今日のゲーム、ウェールズ対日本でも、この力のぶつかり合いがキーポイントになります。

ウェールズはここで日本を崩しにかかるんですけど、日本がスクラムで耐えられれば、今日は接戦になります。スクラムが崩壊すれば大差がつく可能性があると思います。

今日のゲームでスクラムを組む際に、騎馬戦から来ているんだなと頭に留めていただければと思います。

◆ラグビーの歴史と文化

ここからはラグビーの歴史と文化ということでお話ししたいと思います。

ラグビーの起源は数百人で行う村対村の勢力争いで、ものすごい人数でこの川からこっちがうちの村だ、この道からこちらはウチだと村対村の勢力争いのゲームが年に一度のお祭りとしてあったのですが、これが原始フットボールのルーツとなり、のちに何か宝物を相手の陣地に置けば勝ちとなり、その宝物がのちに現在のボールだといわれています。

ラグビーのボール(グラウンドにある H 型のもの)、これは日本でいえば神社の鳥居のようなもので、ピラーみたいなものを表しています。

原始フットボールがラグビーとサッカーに分かれていく中で、ラグビーは上流階級で親しまれ、パブリックスクールで進化、発展を遂げていきました。

サッカーは一般階級を中心に親しまれ、公園や路地などでプレーされ(ストリートフットボール)進化、発展していきました。

◆エリス伝説

もう一つラグビーの起源というものがあまして、有名な話がありましてご存知ですが？

平野 ラグビー校の話ですか？サッカーをやっていたけれど何でもありで、手で持って走ったという

梶原 さっき言ったパブリックスクールの中で、ラグビー校という学校がありまして、そこのエリス少年、ウィリアム・ウェブ・エリスが、サッカーをやっているときにボールを持ってゴールに飛び込んだ。それを見ていた周りの仲間が今の面白いなと手でボールを持って始まった。

今のラグビーワールドカップの優勝杯はウィリアム・ウェブ・エリス・カップ、エリス杯と呼ばれています。

◆パブリックスクールにおける教育とラグビー

パブリックスクールにはイートン校、ウェストミンスター校、エリス少年がボールを持ってトライしたラグビー校等があります。

こちらにパブリックスクールの時程がありますが、アングロサクソンという人々は凶暴だと思っそうですね。中学高校で殴り合いのけんかが多いそうです。

ニュージーランドの高校もそうですが、殴り合ったりというのが一番罰が厳しい。停学とか。日本もそうですが。向こうでは細かいじめより暴力が多い。

そういうエネルギーを違うことに向け、ルールを守って自立した人間を形成するにはラグビーが一番いいのではないかということで、パブリックスクールでは午後の時程に、日本なら体育の時間を全部ラグビーにしている。あとは夕食をとって勉強して寝る。

ここで私は気づいたのですが、日本の子と比べて睡眠時間が長いんですね。うちの娘は小学5年生なのですが、宿題が多くて10時半か11時に寝て6時過ぎには起きて学校に行く。7時間くらいしか寝ていないのですが、彼らは高校生で9時間くらい寝ている。

日本でこの時程をまねたのが茗溪学園です。最初はラグビー部だけを作りました。いまは時代の流れでサッカー部もあるそうですが、ラグビーを中心に置いて、体育もほぼラグビーという授業があるそうです。

私の母校の日川高校もラグビーが校技でして、1年生の体育の授業の半分がラグビーで、残りの半分は長距離走と柔道ですね。キツイ種目で人間的に鍛えて、2年生、3年生になったらバスケット、サッカー、バレーといった楽しい種目をやるんですね。

なぜパブリックスクールでラグビーが取り入れられたかということ、エネルギーの活発な若者に紳士的態度、忍耐、弱者への思いやり、他社への奉仕といったものを培う、こういった精神がラグビーのルールに散りばめられている。

ラグビーはボールを後ろにしか投げられません。昔は前に投げても良かったようですが。キックもオフサイドルールがあるので後ろから走って取りに行かなくてはならない。昔は狡賢い奴がいて前で待っていたのですが、ボールを奪い合っている味方に前で待っていて早くよこせとなると男らしくないではないかということでオフサイドルールが生まれました。

昔は、私もびっくりしたのですが、ラグビーでは審判もいなかったそうです。ではどうやってジャッジしていたかということ、双方のキャプテンが人格者で、職業も医師や弁護士といった、この職業の方が、皆そうではないですが…で、自チームが反則をすればキャプテンが相手にボールを渡していた。そうして成り立っていた。

タックルやコンタクトプレーといった激しいプレー、今日のゲームでも「ばちーん」と音の出る当たりがあると思うのですが、そういう激しいゲームの中でも反則をすれば相手にボールを渡すという判断力、セルフコントロールがラグビーで身に付く。人間形成に効果的であるということで取り入れられました。

ラグビー精神、もちろんサッカー精神にもあるのですが、one for all, all for one、フェアプレー、ノ

ーサイド、after you（お先にどうぞ）といったものがあります。

私自身、ノーサイドというものが大学までよくわかっていなくて、大学の授業でスポーツの歴史をとって、その時にノーサイドってどういう意味だと考えたわけです。サイドが no になり、互いに握手をして友達になる。アフターマッチ・ファンクションといって、戦った相手と激しく戦えば戦うほどに交歓を深める。

アフターユウの精神。英国のスポーツではテニスとかでもあると思うのですが「あなたが先に」。ラグビーでは身を挺してボールを生かす。

◆ラグビーに学んだ人々

いまはラグビーのテレビ放送も少なくなりマイナーになっていますが、ラグビーをプレーした方というと、森喜朗・現ラグビー協会会長をはじめ、ブッシュ大統領、クリントン大統領が挙げられます。オバマ氏は調べていないのですが、歴代米国大統領は英国留学もされているので、授業でプレーをしたり指導を受けたりしています。

英国王室のウィリアム王子はイートン校でプレーされていて、ラグビー選手としてのレベルも高かったそうです。

指揮者の小沢征爾さんも高校では本格的にプレーされていました。大学でもサークルでプレーされていたそうです。

◆ラグビーワールドカップ

ラグビーワールドカップが 2019 年に日本で開催されます。

収益面でオリンピック、サッカー・ワールドカップに次ぐ規模の大会となります。オリンピックが一番大きいのですが、単一競技としてはサッカーに次ぐ大会です。

次回 2015 年イングランド大会では純収益 600 億円といわれています。2019 年の日本はそれ以上の収益をとということでやるのですが…どうでしょうか？

◆ラグビー選手のプロ化

ラグビーワールドカップに私も 1995 年に出場していますが、1995 年の南アフリカ大会の直前に、ラグビーはプロ化したんですね。それまでラグビーはアマチュアリズムを堅持していてアマチュアが主だったのに、海外のナショナルチームの選手の大半が協会と契約してびっくりしました。

1995 年から平尾ジャパンの 2000 年ころまでが、日本が世界と一番差がついた時代だと思います。日本がプロ化の流れに遅れたというのはあったと思います。

◆プロ化してもなお残るアマチュアリズム

ラグビーは文武両道のほうがよいのではないのでしょうか。

われわれ高校の教員の教え子が社会人ラグビーに行くとき、会社は神戸製鋼やサントリー等ですが、「プロにならないか」と言われて契約金 1,000 万円、年俸 2,000 万円の 3 年契約…。人数的には少ないですが、いい選手はそれくらいもらっています。村田さんはもっと高かったようですが（笑）。

しかし教え子には、「プロになるな」と伝えています。30 才前までしかできないよ。アマチュアであればサントリー等で 60 歳まで身分は保証されるし、生涯賃金や保険その他を考えれば、民間の企業に就職するほうがはるかに有利ですね。

ここ 10 年、日本で一番強いのは東芝ですね。最近 1~2 年はサントリーですが。私も東芝出身ですが、まあ固い会社で、周りのサントリー、リコー、クボタ等はプロ選手を抱えている中で、東芝は「日本人は一人もプロ契約しない」、そういう信念を持っていました。でも勝ちまくっていた。

どうしてかな？ と考えたとき、ラグビーはアマチュアリズムが合っているのかなど。体を張らな

いといけないスポーツです。タックルしたら肩が折れるかもしれないけれど、勇気を持って行く。ボールが転がっていたら相手に蹴られるかもしれないけど、体を張る。こうしたことが、お金でできるのかなと。

東芝は平等といえば平等ですね。一番体を張る、一番激しい、コンタクトで惜しみなくやるチームだったのですが、ラグビーではアマチュアの方がまとまるのかな、体を張れるのかなと思いました。

ところで日本国内のプロスポーツ選手ですが一番選手数が多い種目は何だと思いますか？

中塚 ゴルフかな？

浦和 競輪では？

梶原 一位は競輪です。長くできるということですね。二位はゴルフ、三位はプロ野球、案外少ないですね。

中塚 ゴルフはレッスンプロも入っていますね。

梶原 これは5年ほど前の数字で、ラグビーは120人ほどです。今は減っているかもしれません。私のような考えの指導者もいますので、高校の恩師に相談したら社員でやるようにと言われていでしょう。一方外人は各チーム3~44名います。

前回、2011年のラグビーワールドカップは、カーワン監督のもと、結果が出せませんでした。私が出た1991年にジンバブエに勝って以来、引き分けはありますが勝っていません。

現在は、エディ・ジョーンズ監督のもと、ジャパンは挑戦しているところです。

時間もちょうどになりました。歴史と文化ということでお話してきました。情報不足でお答えできなかった点もありましたが機会を作って皆様にお会いできたらと思います。

今日はありがとうございました。

II. プレゼンテーション 2 : 7 人制と 15 人制ラグビーの現状

村田 互 (ラグビー元日本代表選手/専修大学ラグビー部監督)

嶋崎 村田さんは東福岡高校から専修大学を経て、トップリーグではヤマハ等で活躍されました。フランスでもプレーされました。現在は専修大学にお勤めです。

◆はじめに

お話しさせていただく前に、4年間、7人制ラグビーの日本代表監督を務めていました。

2012年4月1日のワールドセブンス東京大会をもって現職の専修大学ラグビー部監督になりました。最後の東京大会が11年ぶりに秩父宮で開催された世界大会だったので何とか結果を出したかったのですが、ギリギリの勝負をした中で勝てなかった。

なぜオリンピックまであと3年というタイミングで7人制日本代表監督を降りたのかということ、専修大学に入ったときに、当時の常務、専務の方に、最初の一年はセブンスに力を入れてもらって構わないが、2年目以降は専修大学ラグビー部に力を入れてくれと言われていました。

専修大学ラグビー部は、2部で丸10年、今年11年目になります。長く低迷している部を早く一部に上げ、昨年のサッカー部のように日本一を勝ち取ってほしいということで、トップダウンで指令が下りまして専修大学の監督をしています。

梶原さんがラグビーの歴史から現状までお話しされたので、私は7人制と15人制というところをさらっとお話ししたいと思います。

◆7人制ラグビーの映像上映

村田氏の説明より

- ・7人制は15人制と同じグラウンドを使って非常にスピーディーです。日本人でも活躍できる場があります。
- ・高校3年生でセブンス代表に選んだ藤田君(東福岡→早稲田大学)は海外でも評判がよく、本当に18歳なのかと注目されました。今日のウェールズ戦でもリザーブに入っています。

◆7人制ラグビーの発祥と現状

15人制ラグビーは1823年発祥ですが、7人制ラグビーは60年後の1883年に、スコットランドで発祥しています。この時の地方がメルローズ地方で行われたので、15人制のワールドカップは「エリス杯」といいますが、7人制ワールドカップは「メルローズ杯」といいます。

7人制は9か国、9大会のワールドセブンスシリーズが行われています。15人制でも7人制でもニュージーランドが強いのですが、7人制で気になるのがケニア代表です。ここ10年くらい前から強化していきまして、前回の7人制ワールドカップではベスト4に入りました。15人制ではランク外(40位くらい)ですね。

もう一つ強いのはフィジーですね。フィジー代表は15人制では8~12位くらいを行ったり来たりしているのですが、セブンスではニュージーランドに次ぐ大国です。

日本は、世界的に有名な「香港セブンス」の40~50年の歴史の中で、優勝したのは3回しかありません。1987、1996、1997年です。優勝といっても1位になったわけではなく、2位グループ、3位グループということです。

セブンスでは、カップ(杯)、プレート(皿)、ボウル(鉢)、シールド(盾)と上から4チームずつグループ分けされて、1位グループだけでなく、カテゴリーごとにそれぞれの優勝チームを選ぶというのがセブンスの良いところだと思います。

優勝チームはそれぞれ表彰台に上がってプレートやボウルをもらえます。

7人制日本代表監督だったとき、学生セブンス大会がポルトガルで開催され、プレート優勝。16チーム中5位になりました、この選手たちが今のセブンス代表の中心になっています。

アジアでは1990年代は本当に韓国が強くて全然勝てなかったのですが、アジア大会では2006年、2010年と、二大会連続で金メダルを獲得しました。

オリンピックの種目になったということで、ラグビー協会内の状況が変わってきました。

競技力向上委員会から代表事業部へ昇格したり、JOCとの連携が強化されたりと良い環境でやれています。

◆香港セブンスとその他の大会

香港セブンスというのが世界で一番有名なセブンス大会なのですが、24か国が参加して、3日間で12万人くらい。会場は4万人のキャパなので、3日間ほぼ満員の中で行われています。

長い歴史の中で日本は3回しか優勝していません。1987年は早稲田のプリンス本城さんがキャプテンの時、1996年は私（村田）がキャプテンだったとき、1999年、現日本代表GMの岩淵がキャプテンだったときの3回です。なかなか優勝できないのが現状です。

世界の年間セブンス大会数ということでは各国1~2大会なのですが、フィジーだけは年間30大会くらいあります。その時期になるとみんなで集まって毎週のように大会をしています。

◆村田ジャパンの強化活動

私も監督の時にフィジーに遠征したのですが、1日に5試合やりました。54チームくらい集まって一日で決める大会だったので、本当に選手は大変でした。

この遠征では10日間で合計24ゲームやって帰ってきたのですが、最初はフィジーはとんでもないチームと思っていたのですが、遠征を終えるとみんな逞しくなっていて、遠征の終盤ではフィジーの選手相手でも当たり前のようにタックルに行けるようになりました。

本当に良い経験になったと思います。

代表選手は日本にいとトップですが、海外に行って上の選手とやらないと成長しないんですね。なので、私が監督の時は、本当にとにかくたくさん外に行ってたくさん経験を積ませました。

◆7人制ラグビーの可能性

ニュージーランドやフィジーといった国はラグビーが国技です。香港も1997年まで英国領だったということで香港セブンスは一番の人気を持っています。

一方、日本ではラグビーの人気がなくなってきたこともあり、「7人制ラグビーって？」という方も多いです。

今後の展望としては、7人制ラグビーが認知されないといけない。一貫指導というのがありますが、日本代表が勝たなくてはいけない。オリンピック種目になり、国体も成年の部が7人制になりました。もっともっと盛り上げないといけないと思っています。

7人制の魅力は、ニュージーランド7人制代表の監督を20年以上されているゴードン・ティッチェンが言うとおりの、「ジャパンがニュージーランドに勝つ可能性があるのがセブンスの魅力である」。

私がセブンス代表のコーチ時代、香港セブンスで残り20秒までニュージーランド代表に勝っていた試合がありました。しかもゴール前でマイボールをキープしており、あと20秒キープして外に出せば勝ちです。そのスクラムで押されてボールを取られて逆襲され、90m切り返されて負けました。

ゴードン・ティッチェンもそのことを忘れていないんです。実際私が監督のとき、フランスやスコットランド、アルゼンチンといった強豪に勝ちました。7人制の良いところは、時間が短いので勝つ可能性が本当にあるんです。たった15分です。

15人制は40分。40分なので、今日のゲームも最後に差が出る可能性があるのですが、(7人制は)15分しかないので勝つ可能性がある。逆に韓国や香港に負ける可能性もあります。下位のチームに負けないような戦術、戦略、システムを構築していかないといけないんです。

ナショナルチームは一貫指導があって、マネジメントスタッフがいて、トップレベルの指導者がトップ選手を吸い上げて代表チームを作るのですが、15人制でもそうですが、強いチームとゲームをやりたいんですね。このマネジメントをしているのが岩淵君ですね。

◆本日のウェールズ戦に向けて

15人制ラグビーは1823年に発祥しました。7人制の60年前に、ラグビー校でエリス少年がボールを持って走ってトライしたという。

今週のワールドランキングでは、ウェールズは5位です。一方日本は15位ですね。

カーワンプランの時に12位くらいまで行きましたね。

ラグビー関係者しかわからないのですが、TOP10に入るのは至難の業です。TOP10とはティア1、いわゆる強豪国。並大抵の努力では入れない。日本はずっと15位くらいを上下しています。

ウェールズは2年連続で、6か国対抗を優勝しています。愛称はレッドドラゴン

日本はアジアでは連覇中ですが、6か国対抗の国に勝ったのは1回だけ。1989年のスコットランド戦のみです。秩父宮で行われたこの試合は、梶原さんのデビュー戦でした。188cmの体を低くしてスコットランドの足首に刺さりまくって勝利したという。今日のような気候のもと行われました。

梶原 今日と全く同じ蒸し暑い5月28日でした。向こうは寒い。で、同じ条件があるんです。ライオンズ(全英選抜)の遠征がその時もあったんです。

あの時のスコットランドは5か国対抗では3位くらいで4~5人ほど欠けていたのですが、今回は2年連続優勝ですから主力は全部ライオンズに行っていて、12~13人行っている。今日はチャンス、大チャンスです。

村田 本当にチャンスですね。相手は1.5本目とされています。前回のスコットランドも1991年の大会でベスト4に入ったチームでしたから。宿沢ジャパンだったのですが、今まで日本ラグビー界一番の快挙だったんですね。

◆テストマッチとCAP(帽子)

テストマッチとは国と国との戦い。私たちは「戦争」と言っています。初めて国際試合に出場するとCAP(帽子)がもらえます。

今日持ってきました。番号が書いてあるのですが、私のは314。314人目の日本代表ということです。いまは500番くらいまで行っています。

梶原 私のは301番ですね。

(CAPは)本当の帽子なんですけど、星がちりばめられています。星ひとつでキャップ5個です。私は41キャップなので星が8個でエイトスターですね。実は8個目の星を8年間いただいてなくて、つい最近いただきまして今朝あわてて縫い付けて来ました。

被れない位のちいさな帽子です。

このCAP(帽子)以外に、ワールドカップに出るとワールドカップのCAP(帽子)をもらえます。私は3大会、梶原さんは2大会出場していますので、私は3つ、梶原さんは2つ持っています。

私は大事にとってありますが梶原さんはどこに行ったか分からない(笑)

◆ J A P A Nは世界に勝てるのか？

今日は勝てるはず。勝たなくてはならない。

7人制も15人制も一緒です。

フランスに行って2シーズン経験した後、37歳のとき、私のポジションであるスクラムハーフにけが人が出て追加招集されました。場所はフランスだったのですが、フランスで合宿してウルグアイに行ってアルゼンチンに行って、日本で韓国とやって最後にアイルランド戦2試合出ました。

37歳の時に5キャップ増えて41キャップになったのですが、フランスに行って2シーズンプレーしたあと、日本代表にさらに誇りを持ちました。

なぜかという、フランスではラグビーも国技に近いといいますが、フランスでも上(北)のほうはサッカーが盛んなんですね。南ではラグビーです。

フランスの国代表でも8万人集まりますが、フランスリーグの決勝でも8万人入ります。キャパは74,888人です。それくらいフランスではラグビーが盛んです。

視聴率は当たり前のように50%を超えます。サッカーでも50%を超えます。

代表戦の次の日は、ラグビー選手でもアップの時にサッカーをやります。

僕もできると思ったのですが、みんなのサッカーのレベルが高すぎてパスが回ってこなくなりました。「村田はラグビーはできるからサッカーもできるだろう」って思ったみたいですが、彼らは切り替えが早いんですね。使えないと思ったらボールが回って来ない。

向こうでラグビーでは使えたので2シーズンプレーして44試合出てきましたが。

その後出てこないのかなと思っていたら今年私と同じスクラムハーフで田中選手が、フランスより上のスーパーラグビー、ニュージーランド、オーストラリア、南アの地区代表のトップ15チームのプロリーグに彼は出場しています。

これはすごいことです。スタメンでも2試合出ました。

今日は彼も出ます。顔つきが変わりましたね。このシーズン、ニュージーランドでやってきた経験が今日の試合で発揮されるかなと思います。

実は金星を取れたのはむしろ先週の試合だったのです。

先週は千載一遇のチャンスを逃したので、1週間空いてウェールズは満を持して日本代表の研究もしてきますので相当に厳しい戦いになると思います。

ここで勝てば1989年のスコットランドに勝った以来の快挙になるはずです。

今日は皆さん大声援を送って日本代表を応援してください。

Ⅲ. ディスカッション

◆7人制ラグビーの競技力向上のために

浦和 村田さんは7人制を強化されていくなかで、他競技でアスリート能力の高い選手に7人制ラグビーを指導するのと15人制のラグビー選手に7人制を指導するのとどちらが強化の近道になるとお考えですか？

村田 短期的には、特に男子の場合はトップリーグという組織があるので、トップリーグの選手を呼ぶのが早い。なおかつ7人制に向けた選手を選んできました。

中長期的では、特に女子は半分近くが他競技から来ています。特に陸上、400m やハードル、フィールド競技の少し体の大きな選手が入ってきていて、1年で日本代表になっています。

女子は歴史が浅いので他競技から入るのも可能だし、オリンピックに近いのかなと思います。

男子はトップリーグから選んで、ゆくゆくはセブンス専門の選手を作って、日本でもフィジーのように毎週大会ができる組織ができればよいと思います。

浦和 観客として見ていて、7人制と15人制で選手の取り合いになって選手がもったいないなど見える時もあります。

村田 実はそこが監督として一番頭を痛めたところで、4年間監督をやって最初にやったことが人脈づくりなんです。各チームの監督さんのところに足を運んでお願いしに行く。たとえばエディ・ジョーンズがサントリーの監督をされていたとき、彼は15人制の選手だから出さない、出さないといわれていました。2010年アジア大会の時は、「成田は出すけど長友は出さない」ということがあって、私としては決定力のあるウィングの選手がほしくて長友選手を誘っていました。最後の最後、大会に行く直前に招集できて、アジア大会では決定的なトライを取って勝ったということがありました。このようにまずお願いしに行くということが大事なんです。

本来、これはあってはいけないことなんです。そもそも監督がお願いに行くというのがだめですし、協会の上の方が各チームに交渉して選手を招集できなくてはいけない。

一方、エディ・ジョーンズの言うとおりに、そちらはそちらのシーズンがあるので、アジア大会はウィンドウマンズの11月なので本来は貸せる期間なんですけど貸さないチームもあります。あるチームに良い選手がたくさんいても、バランスを取らなくてはいけないので、良い選手を全部招集できないのが7人制の現状です。

よく言われたのが、各チーム一人ずつにしてほしいということです。各チームから推薦されたメンバーで組んだこともあります。

チームが推薦する選手は一本目ではないんですね。Bチームから推薦してくる。それでは日本代表が作れない。そういう選手は招集できない。

日本代表は世界で戦っているんで、世界で通用する選手をBチームから発掘して、伸びそうな選手を見つけて相思相愛の時もあるのですが、15人制の日本代表に選ばれればガードされる。これの繰り返しでした。ここを整理していかないと。もう（オリンピックまで）3年後ですから。

1年間は同じチームで一貫指導していかないと世界では到底戦えない。

ニュージーランドでは完全に棲み分けしています。ニュージーランドでも7人制代表から15人制代表という流れはあります。これは仕方ない。

浦和 ナショナルチーム内で7人制から15人制という流れは別にして、7人制代表としてチームを固

めていかないといけない。結果が出ていけばセブンス代表のステータスも上がり、選手を企業から招集できる環境ができるのでは？

村田 日本が他国から遅れているのは、7人制の選手は企業から借りるのですがほぼボランティア、お金は一切出ない。ファイトマネーが出ない。15人制は日本協会と契約するのである程度のファイトマネーが出て選手に還元されている。ステータスを上げていけば、セブンスにも企業が選手を貸せる方向になるのでは。

浦和 ワールドセブンスのコアチーム(全9大会に参加できる12チームのこと)に入ればファイトマネーが出たりしますか？たとえばワールドセブンス参加によるエントリー賞金が分配されたりしますか？

村田 可能性はありますが、海外のチームでもそういった話は聞かないです。協会と契約しているので協会から選手にお金が支給されています。

日本は協会と契約まで至っていないので、頭を下げて借りて経験を積ませて、今度は上に行けますよ、日本代表に上がれますよと。

私が4年間監督をやって良かったのは、10人以上の選手が15人制の日本代表になりました。ただ今度は、7人制に貸してもらえないということもありました。

◆エリス伝説について—フットボールの歴史を振り返る

中塚 今日のウェールズ戦がますます楽しみになる話をありがとうございます。

お二人の話の中で出てきた、1823年のウィリアム・ウェブ・エリスの話ですが、一般の方にはこんなふうに伝わっていると思います。

サッカーの試合中に、興奮した少年がボールを持って走り出した。そのときは反則になったけど、面白そうだということで、サッカーからラグビーが生まれた。

この話にはそもそも大きな間違いがあります。当時はサッカーもラグビーもなく、原始フットボールでした。パブリックスクール毎に独自のルールでフットボールをやっていたので、正しくは「フットボールの試合中に～」というわけですが、誰かが football をサッカーのことだと誤訳して、サッカーからラグビーが生まれたという話になってしまった。この話は間違っただけで伝えられていますね。それと、そもそもこの話は作り話だという論文も、昔からいくつもあります。

ラグビー界の方はこのことをどのように認識されているのでしょうか？

お二人のラグビー愛を聞いている中でこのような質問をするのは申し訳ないのですが(笑)。

梶原 私の見解は、ルーツを二つにして、二つの流れのうちどちらかが真実かはわからない。そういう結論です。

学校毎のルールがあったのは確かですが。このなかではサッカーと表現しましたが、少年が持ったということは肯定したいと。ワールドカップのトロフィーはエリス杯ですし。

中塚 筑波大のスポーツ史の阿部生雄先生の論文には、ラグビーユニオンを作った際に、ラグビー校の人たちは創設メンバーには入っていなかった。のちに彼らが入ってくる時に、「俺たちがルーツだ」と言う為このようなストーリーを、ラグビー校の中で伝説として語られていたものとして持ってきたのだというエピソードを紹介されていました。

エリス杯はエリス杯で良いし、1823年も良い。そのころはいろいろなフットボールが乱立していた時代で、ラグビー校の教育にラグビーフットボールが大切なものとして位置付けられ、ここからラ

グビー精神につながっているのは間違いないと思います。

その一方で、例えば「ノーサイド精神」はラグビーの精神であるかのように語られていますが、本当は分化する前の「フットボール」が共通に持っていた考えだろうと思いますし、サッカーでも「ノーサイド」をもっと語っていきたいと思います。

村田 おっしゃる通りで、そもそもエリス少年がいたかというのも問題でして、1880～1890年代に調べた方もいらっしゃるようです。

しかしラグビー界としてはいることにしようと（一同笑）、銅像を作った。

梶原 居たかもしれない（笑）。

村田 そういう名前はあったみたいですね。

嶋崎 ラグビー校にはプレートがはめ込まれていますよね。

◆7人制ラグビーの環境

参加者 セブンスのプロリーグは吉田さんが作ると聞きましたが、ご存知ですか？

村田 吉田義人さんから相談されたことはありますが…。全然具体的にはなっていないです。彼の個人的な人脈で動いているようですね。

◆大学ラグビーのあり方

参加者 お二人とも教育に携わっておられて文武両道というお話をされていらしたが、高校ラグビー、大学ラグビーという流れで藤田君、福岡君のような伸びしろがあるなかで、大学で伸びきれないかもしれない選手がいる一方、長い人生を考えると、自分も大学でやったのはよかったという思いがあります。大学ラグビーをどのようにお考えですか？

梶原 難しいですね。エディ・ジョーンズははっきり、いまの大学ラグビーのシステムでは強化が遅れるとっていますね。僕は高校の教員ですから、いまのシステムのほうが人間作りとかそちらのほうに頭があるので。

村田 私は専修大学の指導者ですから、学校には行かせています。ある時間で練習するとなると、朝と夜しかない。

卒業後もラグビーを続けてほしいというのがあります。

しかし本当に日本代表が勝つには、大学の4年間をどう過ごすかは大事になります。大学に通うことで人間形成もされます。

高校からプロになると、体力的には一番伸び盛りですね。日本代表がトップ8を目指す中で、プロ化も必要なのかなと思います。

プロで4年間やって就職できるのかなと。サッカー界や野球界ではセカンドキャリアの事業を研究されてる方もたくさんいらっしゃいますが。

やった以上はそのあと何か返ってくるシステムがあれば、若い選手でもプロになって、この4年は体を作る、試合に出るとなりますね。

大学と社会人で二重登録できるようなシステムがあればよいですね。たとえば藤田君は早稲田ですが、サントリーでも出られる。そういうことができれば面白いのかなと思います。

嶋崎 まだまだお話は尽きませんがテストマッチの時間もありますので、この辺で締めさせていただきます。ゲストのお二方大変良いお話を伺いました。
ありがとうございました。

*****以下は月例会後の活動報告（文責：中塚義実）*****

第2部 《テストマッチ観戦》

【日時】13：20頃現地着（試合は14：00K.O.）

【会場】秩父宮ラグビー場

【概要】

暑かった。そして熱かった。1989年のスコットランド戦以来（演者の梶原さんはその試合がデビュー戦だった）のティア1（ランキングベスト10の「第1層」国）からの勝利は歴史的と言えるだろう。

観客21,062人は、「実数発表が始まった04年以降の国内代表戦の最多記録を更新した」（6/17朝日新聞朝刊）とのこと。ラグビー観戦でいつも思うのは、サッカーの客層に比べて一回り体格のよいお兄さんやおじさんが多いということ。「昔やっとな」という方々である。年配者が多いのも特徴である。それらに加えて、この日は「いまもやってる」感じの高校生や大学生、そして子どもたちの姿が多く見られたのが印象的であった。体格のいいお兄さんに誘われた彼女ふう(?)の女性もいたし、英国人ふう(?)の外国人の姿も…。国際試合の雰囲気は、どのスポーツでも楽しい。

試合内容については、論客がおられるのでそちらに譲るが、とても充実したゲームであった。

なお、演者の村田さんは自チームの練習試合(!?)、参加予定だった梶原さんは急遽地元で用事ができ、ともに観戦はかなわなかった。お気の毒に…。

第3部 《アフターマッチファンクション》

【日時】16：40頃～20：00頃

【会場】福縁 (fu-yuan)

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-52-2 青山オーバルビルB1

TEL：03-5466-1588 HP：<http://r.gnavi.co.jp/g885802/>

【参加者（会員）13名】五十嵐雅人、井上俊也、浦和俊介、浦和隆、金子正彦、小池正通、嶋崎雅規、白井久明、白髭隆幸、武井大介、中塚義実、平野貴大、&小池靖（ビバ！サッカー研究会／浦和文蔵サッカースポーツ少年団）が遅れて参加

【概要】

暑かったのでビールがうまい！（もちろん紹興酒も）。3時間という時間設定もちょうどよい。

1時間ほど経過したところで小池靖さんが登場。初参加の方もおられるので、そのタイミングで自己紹介兼本日のコメントを求めた。浦和俊介氏はかつてサロン in 高知で0歳児の息子を参加させ、今回は父親も登場、3世代のサロン出場となった。ちなみに井上俊也氏は1997年の夏合宿（Jヴィレッジで開催）に1歳の娘を登場させたとのこと。忘れていたが、そんなこともあったなあ。

話題は多岐に及ぶ。ウェールズとの歴史的な勝利、2019年のワールドカップ、ラグビー人の気質、そしてコンフェデレーションズカップ…。

2次会に流れることもなく、人々は速やかに帰宅した（はず）。私は早々に床に就き、4時前に起きたのは言うまでもない（試合後すぐに神戸へ帰った本多氏も、飲み会が新幹線移動に代わっただけ、同じパターンだったはず）。

盛り沢山で、とても楽しい一日であった。

以上